熊野の森から

怪しの熊野

其の四六 「太地の怪異」

和歌山大学
システム工学部
環境システム学科
中島敦司教授

太地周辺の海に出没した「栄螺鬼（さざえおに）」は、30年生きたサザエが女の姿に化けた妖怪だ（イラストはBoBo）

太地町は、なんといっても古式捕鯨の街として世界的に有名だ。海外から批判されることもある太地の捕鯨だが、その一方で、私たち日本人が食や生活にかかる歴史や文化を考えるきかけにもなっている。近年になって、日本の古式捕鯨を世界も評価し始めるように徐々になってきたが、太地はその象徴的な場所となっている。

となると、太地にはさぞかし多くのクジラに関わる妖怪話があるかと調べてみたが、そんなことはなく、むしろクジラと人々の深い関係を物語る伝承が残されてる。それは、太地の人々が、クジラを尊敬し、大切に扱ってきたからだろうと解釈される。

太地小学校の移転のため、昭和三年に切り崩された天狗山（太地町町史より）

太地の妖怪話の中では、「栄螺鬼（さざえおに）」が有名である。長命のサザエが変化（へんげ）したもので、美しい女に化けて海に漂う。女が溺れていると勘違いした海の男達の下心を惑わす危険な存在であったようで、その類話は千葉県の房総半島にも残されている。ゲゲゲの鬼太郎の常連妖怪だ。房総では女房から亭主を奪うヒドイ女だという話もある。その房総であるが、木更津（きさらづ）に日本武尊が退治した蝮「太地非（たじひ）」の伝承がある。太地非の話は神話の時代の話であるが、仁徳天皇の時代に千葉に派遣された田道（たじ）将軍が戦死している話と混じったと解釈する研究者もいる。ちなみに、太地の地名は、平維盛（たいらのこれもり）が熊野落ちする際、辺りで太刀を落としたことから太地となったという説もある。

一方、紀南の獅子舞にはご多分にもれず天狗が登場する。太地の飛鳥神社の獅子舞にも登場する。井原西鶴（いはらさいかく）は『日本永代蔵』の中の「天狗は家名の風車」にて泰地（たいじ）の「天狗源内」ことを記している。源内のモデルは一六五七年に網取り法を考案した太地角右衛門（旧名和田頼治）、天狗は家名、風車は家紋のことであり、怪異話などではない。なお、太地家の家紋は「鶴の丸」である。また、意外に知られていないことだが、現在の太地小学校は、昭和三年に岩山であった「天狗山」を切り崩して校地を造成したことが町史に記載されている。この天狗山にはどんな話があったのだろうか？

中島敦司（なかしま・あつし）教授プロフィール

昭和38年、岐阜県生まれ。三重大学大学院生物資源研究科博士後期課程を修了。平成8年から和歌山大学システム工学部講師、12年から助教授。19年から教授。専門は森林生態、自然再生、砂漠緑化、海岸林再生、地域資源、地球温暖化、自然エネルギー、民俗（妖怪、伝承）。NPO活動にも力を入れる。熊野方面には年間30～50日は訪問し、研究する。